

令和元年5月31日現在

機関番号：33917

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07224

研究課題名（和文）史的文献研究と現代方言研究を統合した漢語常用語彙研究

研究課題名（英文）Analyzing the Changes to Common-use Sinitic Vocabulary Combining the Research on Historical Literature and Modern Dialects

研究代表者

鈴木 史己（Suzuki, Fumiki）

南山大学・外国語学部・講師

研究者番号：20803886

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代方言の語形分布地図を作成・分析する言語地理学研究と、史的文献調査を両輪として、中国語の常用語彙の歴史の解明を目指すものである。史的文献においては、ある意味を表す主要な語形が別の語形に交替する現象が観察される。この現象は、必ずしも漢語全体に起こった変化ではなく、程度の差こそあれ、局地的に発生した変化を反映するものであることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

史的文献研究と現代方言研究の統合の試みは少なくないが、語形分布地図を作成・分析する言語地理学的手法を現代方言研究に用いたことに本研究の特徴がある。言語地理学研究による語彙変化の推定と、史的文献に基づいた記述をつきあわせることで、より精度の高い歴史的变化の過程を明らかにするとともに、そのメカニズムを現代方言と史的文献の双方から漢語語彙史の中に位置づけようと試みた点に学術的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：Combining the research of historical literature and modern dialects, this study attempts to clarify the diachronic changes in common-use Sinitic vocabulary. In historical literature, it has been observed that the main word form denoting a certain meaning was sometimes replaced by other word forms. This study found that this phenomenon did not always represent a fundamental change to Sinitic but was a reflection of changes which occurred in local areas to varying extents.

研究分野：中国語学

キーワード：言語地理学 漢語方言 漢語語彙史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 漢語語彙史研究においては、史的文献を調査することで語彙の使用状況を記述し、その変化の規則性を考察するのが主要な方法である。文献調査の結果を現代漢語方言とつきあわせて検証することも有力な手法の一つであり、報告者は言語現象の共時的分布から通時的変化の過程とその原因を明らかにすることを特徴とする言語地理学的手法によって漢語語彙史研究にアプローチしてきた。これまでの研究成果により、漢語語彙史に対する言語地理学的手法の有用性の一例を示すこと、中国語における言語地理学的研究のサンプルを提供するという点では、一定程度の目的を達成できたと考える。しかし、その成果を漢語語彙史研究に還元するために、史的文献研究による検証が不可欠である。

(2) 従来の研究では、言語地理学的研究では史的文献にみられる用例を、文献的語彙史研究では現代方言の情報をいずれも補助的に参照することとどまり、両者を真の意味で統合できてはいない。史的文献研究と現代方言研究の統合の試みは少なくないが、現代方言研究に言語地理学的手法を用いた本格的な研究は、管見の限り未だ行われていない。漢語語彙史全体を見通す意識をもち、史的文献による記述と言語地理学的研究による再構成をつきあわせることで、より精度の高い変遷過程及びそのメカニズムが得られることが期待される。

2. 研究の目的

(1) 言語地理学的手法による現代方言研究と、史的文献研究を統合して、中国語における常用語彙の歴史的变化を分析する。史的文献による語彙使用状況の記述と、言語地理学的研究による歴史的变化の再構成をつきあわせることで、より精度の高い通時的変化の過程及びそのメカニズムを得ることを目指す。

(2) 史的文献と現代方言の双方において、語彙交替、同義衝突の二点を考察することを軸として、個別の語形式・用法にとどまらず、個別事例に通底する言語変化のメカニズムを検証することを目的とする。分析の結果明らかになったメカニズムを漢語語彙史の中に位置づけ、それをさらに個別事例に還元することで、漢語語彙史研究全体を見通す視野の獲得を目指す。

3. 研究の方法

史的文献研究と言語地理学的研究を高度な水準で統合することを目的として、基礎研究と応用研究の2段階を設定する。

(1) 基礎研究：意味を単位とした個別の語彙項目について、以下の3つの工程に従って通時的変化を考察・分析する。

言語地理学的研究：主に既存の方言調査報告によって現代方言における語形分布地図を作成し、その地理的分布に基づいて地理・歴史・文化・風俗などの言語外要素を結合させながら解釈する。史的文献との統合を前提としているため、語形分布地図は時間的スパンの長い通時的変化の再構成を可能とする全国規模の広域地図を作成し、地理的分布の解釈に重きを置く。

史的文献調査：漢語史における基本資料を中心として史的文献を調査することで、各資料・各時代における語彙の使用状況や、主要語形が交替する過程を記述し、その変化の規則性を考察する。

現代方言研究と文献調査の統合：史的文献調査による記述と、言語地理学的研究による再構成を通して得られた通時的変化を総合して、相互に検証するとともに解釈を加える。方言研究と文献調査の結果は必ずしも一致しないが、その不一致をもたらした原因を探ることで新たなメカニズムが発見されることも期待される。

これらの3つの工程は実際には同時並行的に行われる場合が多いが、従来の文献的語彙史研究にはなかった言語地理学的研究の角度からアプローチすることを原則とする。

(2) 応用研究：上記の基礎研究による個別事例に基づいて、史的文献における語彙交替のメカニズムと現代方言に見られる現象との関連性、言語地理学的手法で重視される同義衝突現象が史的文献においても観察されるかどうか、またそれがいかなる意義をもつのか、について考察する。

4. 研究成果

(1) 「鉄(iron)」/「風(wind)」：現代漢語方言における「鉄」は、ほぼ単音節語形“鉄”の一様分布と言ってよく、音声形式は各方言の音韻体系に従った規則形を示す。通時的にみても、語彙差はほとんど観察されない。「風」も類似の状況にあり、共起する動詞の差異を除けば語彙差は見られず、単音節語形“風”の一様分布である。ただし、これらの項目の中国語の語形形式は、近隣の諸言語において借用現象が観察され、他言語との比較研究に資料を提供するものとしても意義が認められる。

(2) 「雨が降る(It rains)」：北京語の“下雨”のように、「雨」を表す名詞成分と、「降る」などの意味を表す動詞成分から成る。名詞成分は“雨”の他に“水”がある程度で方言差が少

ないが、動詞成分は“下”・“落”・“盪”・“做”などのバリエーションがみられる。動詞成分に着目して語形分布地図を作成すると、北方に“下雨”、南方に“落雨”が分布する南北対立を示す(右図1参照)。中国語方言で南北対立を示す場合、北方の語形が新しく、南方の語形が古形であるケースが多い。“下”と“落”の境界線付近にあたる安徽地方では両者が併用されるが、降雨量によって使い分けがあり、“下雨”は一般的な表現、“落雨”は小雨の場合に用いられる(岩田(2012:138))。史的文献においては、「落ちる」意を表す主導的な語形は“落”であるが、「(雨が)降る」意としては“下”・“落”ともに漢代に初出例が見いだされる。当時の北方方言を反映するとされる宋代の資料で“落”の使用頻度が低くなっていくことから、遅くとも南宋末には北方官話地域で“落”を使用しなくなったことが推測される(張雁(2016))。すなわち、現在の南北対立の分布状況は南宋末にまで遡る可能性がある。



図1 「雨が降る」の地図 (Suzuki (2018:30))
注: 凡例表示は報告者による

(3) 「顔(face)」: 現代方言では北方に“臉”、南方に“面”が分布する南北対立を示す(右図2参照)。“臉”が長江を越えて南まで分布することと、中国語方言では北から南へと伝播する傾向があることから、北方で新たに発生した“臉”が古形の“面”に取って代わったと推定される。また、両者の境界線の東端にあたり、語彙差の大きい江蘇省・浙江省の狭域詳細地図の分析により、顔の一部分である「頬」を表す語形などの指示対象が拡大して「顔(全体)」を表す現象が観察された。一方、史的文献による先行研究では、かつては“面”が主導的地位を占め、その後もともと「女性の頬」を指した“臉”が「(男女を問わず)顔(全体)」へと指示対象を拡大するとともに“面”に取って代わったと結論づける(章黎平・解海江(2015:45-50)など)。“臉”が「女性の頬」を指した痕跡は現代方言では見出せないものの、「頬」から「顔(全体)」への語義拡大は現代方言においても観察される。現代方言研究と文献研究の結果がおおむね一致している例の一つと言える。

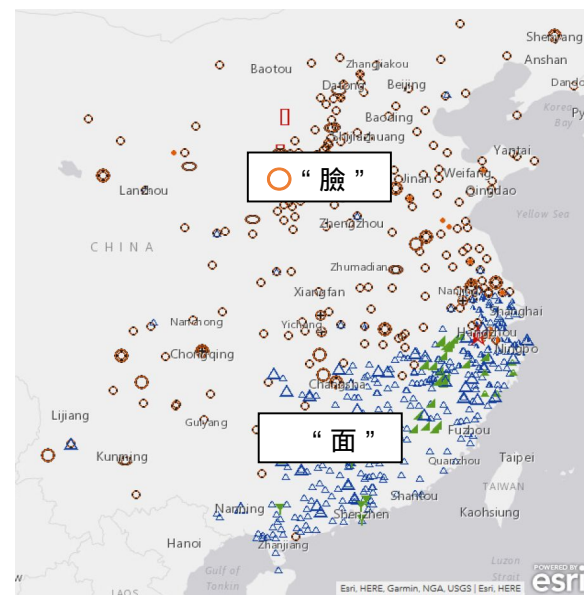


図2 「顔」の地図 (鈴木(近刊))
注: 凡例表示は報告者による

(4) 本研究が扱った語彙項目のうち、「雨が降る」の動詞成分と「顔」で語彙交替が観察された。「雨が降る」では、ほぼ同時期に発生した“下”と“落”のうち、北方方言を反映されるとされる文献資料では“下”が用いられるようになったのに対し、南方方言では「落ちる」意の常用語である“落”が保存された。「顔」では、“面”>“臉”の交替が起こったが、実際には北方方言に認められる変化にすぎず、南方方言では“面”が堅持されている。史的文献における語彙交替は、程度の差こそあれ、局地的に発生した現象を反映するものであるといえ、それがどれほどの地域に影響を及ぼすかは語彙項目によって条件が異なる。その法則性の解明については、個別事例のさらなる蓄積が不可欠であるため、今後の課題としたい。

(5) 「同義衝突」はある一つの意味(指示対象)をめぐる展開する二つの形式の間の争いと定義される(岩田(2009:24))。主に方言同士の接触などの外的要因によって発生する現象であるが、上述の通り、史的文献で観察される語彙交替は必ずしも当時の漢語全体の実態を示すものではなく、地域性が認められる。これらの現象は同義衝突の痕跡と解釈してよい場合もあると思われるが、史的文献資料が反映する言語は必ずしも等質ではないため、慎重な判断が必要となろう。

<引用文献>

Suzuki, Fumiki, “It rains” in Sinitic, *Studies in Asian Geolinguistics VIII*, 2018,

pp.29 30

<https://publication.aa-ken.jp/>

岩田 礼 編、漢語方言解釈地図(続集) 好文出版、2012

張 雁、興替と選択：“下雨”“落雨”の歴史比較考察、湖北大学学报(哲学社会科学版)、第43巻、第4期、2016、pp.75 81

鈴木 史己、漢語方言有關“臉”の詞語比較 以江浙地区の高精細度地図為線索、鈴木 博之、遠藤 光暁 主編、東部亞洲地理語言學論文集、近刊

<https://publication.aa-ken.jp/>

章 黎平、解 海江、漢語核心人體詞共時與歷時比較研究、中国社会科学出版社、2015

岩田 礼 編、漢語方言解釈地図、白帝社、2009

5 . 主な発表論文等

[雑誌論文](計4件)

Suzuki, Fumiki、 “It rains” in Sinitic、Studies in Asian Geolinguistics VIII、2018、pp.29 30

<https://publication.aa-ken.jp/>

鈴木 史己、試論表名物詞多様化的成因 以表 高粱 義詞爲例、中國語學研究『開篇』、査読有、第36号、2018、pp.179 192

Suzuki, Fumiki、Takashi Ueya、Kenji Yagi、 “Iron” in Sinitic、Studies in Asian Geolinguistics V IRON 、VIII、2017、pp.7 8

<https://publication.aa-ken.jp/>

Yagi, Kenji、Takashi Ueya、Fumiki Suzuki、 “Wind” in Sinitic、Studies in Asian Geolinguistics IV WIND 、VIII、2017、pp.8 9

<https://publication.aa-ken.jp/>

[学会発表](計1件)

鈴木 史己、漢語方言有關“臉”の詞語比較 以江浙地区の高精細度地図為線索、漢語方言比較和地理研究論壇、2018

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。